ハーヴァード大学における学部教育の現況

人文学部　岡　本　拓　司

Undergraduate Education at Harvard University: Its Faculty and Curricular System

Takuji OKAMOTO (Faculty of Humanities)

"Core Curriculum" has been influencial in the American colleges since its introduction at Harvard University in the 1980s. It is designed to afford students broader perspective of learning, in contrast with "concentration" program that constitutes a more specialized part of college education.

In this paper I will discuss the undergraduate instruction system at Harvard University as well as the faculty in charge of it. "The Faculty of Arts and Sciences," that administers Harvard College and Graduate School of Arts and Sciences, has over 700 members from 30 departments and 2 divisions, providing a basis of considerable variety and high level of undergraduate courses under the cooperation with the other Faculties at Harvard. Core Curriculum, expected to show "the major approaches to knowledge," consists of 10 areas, students being required to take one course in 8 of them. Each student must also select a field of concentration from more than 40 areas governed by the departments and trans-departmental standing committees. In both Core and concentration, the emphasis is put on the acquisition of methodology and analytical skills, and, through the relatively flexible system, it is always possible for students, according to their ability and interest, to attend more advanced courses including those primarily for graduates.

Key words: Harvard University, Core Curriculum, Fields of Concentration, Undergraduate education

はじめに

筆者は、1994年8月より1995年6月まで、フルブライト奨学金を得て、アメリカ合衆国マサチューセッツ州にあるハーヴァード大学（Harvard University）に留学する機会を得た。正式に在籍したのは、教養大学院（Graduate School of Arts and Sciences）の科学史学科であり、また、留学の目的も同学科においてアメリカの科学技術史の研究を行うことにあったため、留学期間中、現在のハーヴァードの教育体制に関して、また特に学部教育に関して、意識的に調査を行ったわけではない。しかし、留学生活を通して、この大学独特の教育体制につき、若干のことは見聞きする機会を得、また、さらに幾つかのことは実際に体験することも出来た。中でもとりわけ興味深く感じられたのは、1980年代初頭にハーヴァードで始まった学部教育の新しい試み、コア・カリキュラムとコンセントレーションの組み合わせという制度であった。

アメリカの大学教育の諸制度の中で、実質はともかく、制度として日本の大学教育との対比が極めて明瞭になるものは、それほど多くないように思われる。筆者の目には、両者の最も重要な対立点は、大学院教育と一般教育にあるように映る。このうち、大学院教育での相違点は、もともと理工系においてはそれほど顕著ではなかったともいえるが、人文・社会系においても、日本側で学位授与を奨励する動きが高まるにつれ、制度として特に取り上げるほどの大きな違いは、善かれ悪しかれ、少なくなってきたように思われる。

これに対して、一般教育における相違点と、関連する学部教育全般における相違点には、相変わらず顕著なものがあるようであり、また、違いの大きさに応じて、参考にすべき点も多くあるものと思われる。近年、日本の大学においては、教養教育・一般教育における改革の機運が高まり、新しいとりくみが種々試みられてはいるが、その成果をもとに行く末を見定めるという段階には至っていない。ハーヴァードにおけるコア・カリキュラムとコンセントレーションという制度も、J．B．コナント学長以来の「一般教育」という理念が通用しなくなりつつあった1970年代に、デレク・ボック学長、ヘンリー・ロソフスキー教養教員団長の主導下での白熱した議論にかけられ、様々な修正を経たのちに実施されたのであった。その後のハーヴァードの成果と、アメリカの諸大学にこの制度が及ぼした影響の大きさからみると、同大学の学部教育改革は、一応は成功例と見做しうるであろう。ハーヴァードにおける学部教育の現況についての情報も、日本における大学教育の改革のための議論に対して、多少は刺激を与えるのではないかと思われる。はなはだ不完全ではあるが、以下に短い報告を記す次第である。

なお、用語についてお断りしておく。日本語の「学部教育」という言葉は、大学院以前の通常4年間からなる教育をさす場合と、さらにその中の後半部の、各学部、より詳しくは各学科ごとに行われる専門教育を特に強調してさす場合とがあるように思われる。ハーヴァードの教育体制を論ずる際に、理学部や文学部といった組織を連想させる「学部」教育という言葉を用いるのには若干の抵抗感があるが、本稿では、前者の意味で、すなわち、undergraduate educationの訳語として、「学部教育」という言葉を用いる。「抵抗感」の中身は、大学の機構を紹介するうちに明らかになると思われる。

また、「一般教育」は、むろんgeneral educationの訳であるが、学部・大学院での専門教育に対比させて用いている。教養教育という言葉もあり、言葉の違いに応じた意味合いのずれもあるが、ここでは繁雑さを避け、一般教育という言葉を一貫して用いることとする。学部教育のうち、一般教育とはことなる部分は、専門教育と呼ぶこととする。

教育体制と教員団組織の概要
——学部教育の位置づけ——

我々が、通常、大学教育という言葉でイメージするものは4年間の学部教育であり、それに応じて、「大学院化」という言葉が目に付く昨今でも、大学の組織は、学部教育を中心に構成されているという意識が強いように思う。しかしながら、ハーヴァード大学において4年制の学部教育を行う機関、すなわちハーヴァード・カレッジは、組織上は大学の根幹をなしているとはいい難い。大学全体の長である学長からみれば、カレッジは、10ある教員団のうちの一つ、教養教員団に所属する一組織でしかない。ただしこのことは、学部教育が大学の中で軽んじられていることを意味するわけではない。むしろ逆に、以下で明らかにするように、この体制は、学部教育の一貫性と質の高さを保証しようとするものであると考えることができる。

ハーヴァード大学は、基本的に10の教員団（faculty）から構成されている。facultyという言葉は「学部」と訳されることもしばしばあるが、ここでは、一定の専門領域や一まとまりの組織に所属する教員団という意味で用いられている。10の教員団のうちわけは、教養（Arts and Sciences）・経営学・歯学・建築および都市計画・神学・教育学・政治学・法学・医学・保健であるが、このうち教養教員団（The Faculty of Arts and Sciences）は飛び抜けて大きく、700名以上の教員が所属して、毎年合計約1,250の講義を担当している（GS、p．8.）。この規模は、大学の他の教員団の全てを合わせたものに匹敵する（HS、p．8.）。なお、教職員の合計は、全学で約20,000人であり、そのうちの多くは非常勤である（HS、p．6.）。

ハーヴァード・カレッジは、教養教員団によって管理されている。教養教員団の規模が大きいのは、この下に、4学年の大学生全体を抱え込むハーヴァード・カレッジと、ハーヴァード最大の大学院、教養大学院が所属しているからである。カレッジには、1学年1,900人前後、全体で約8,000人の学生が在籍している（表2の卒業生数、及び、1993年6月時点での1987年入学学生の卒業・修了者の割合が97％であるという記述から推計。HS、p．iii.）。また、教養大学院には、

毎年約550人が入学し、常時3,000人あまりが在籍する（GS、p. 10.）。年間約30,000人と推計される聴講生やサマー・スクール生を別にすれば、全学のフルタイムの学生数は約17,000人である（HS、p. 6.）から、ハーヴァード・カレッジと教養大学院がハーヴァードにおいてもつ意味の大きさは明らかであろう。これに対し、ほかの教員団が携わるのは、主として大学院教育のみであり、たとえば、経営学教員団はケーススタディー方式で名高い経営学大学院での教育を担当し、政治学教員団はＪ．Ｆ．ケネディーに因んで設立されたケネディー政治学大学院での教育を行う。facultyということばを「学部」と訳せないのは、こうした事情による。なお、この他に、それぞれの分野に関連する研究所・図書館・博物館などの運営も、各教員団に委ねられている。

教養教員団は、所属教員数と、直接関わる学生の数、および担当する講義数が大きいだけでなく、機能と設備からいっても、１つの総合大学の学部教育と、その上の大学院を形成するだけの規模を有している。このことは、教養教員団の学科構成を見れば明らかであり、同教員団の抱える30の学科と２つの分科によって、自然科学、人文・社会諸学、医学、工学、芸術などの学問分野は、ほとんど覆い尽くされている（表１、及びCI、p. v.）。

学部教育・教養大学院教育の大部分は、教員団の基本的な構成単位である諸学科によって運営されており、後でみる専門教育のコンセントレーションや、教養大学院での学位取得プログラムの分野構成は、ほぼこの学科構成と一致する。ただし、32の学科および分科に対し、大学院のプログラムが50程度（GS、pp. B-I.）、コンセントレーションの諸分野が41（FC、pp. 8-11.）あるため、学科横断的な委員会の管理下におかれる領域や、他教員団のメンバーを交えた委員会によって運営される分野も存在する。また、コア・カリキュラムについては、分野別にではなく、カリキュラム全体を、学科横断的な一委員会が統括している。なお、ほとんどの分野に、学科や運営委員会に所属しない教員（教養教員団に所属するしないを問わず）や、名誉教授などの担当する講義が数多くある。

学科が直接管理を行わない特殊な分野について、幾つか例を紹介しよう（CI）。教員団には、学科以外に、応用科学と医科学の２つの分科があるが、このうち、医科学分科（後でみるように、医科学というコンセントレーションは存在せず、同分科は主として大学院教育のみに関わる）の運営委員会の教員のほとんどは、医学教員団のみに所属するメンバーである。また、大学院・コンセントレーションともに宗教研究に類する分野をもつが、教養教員団の中には「宗教学科」に相当する組織は存在せず、同分野は、教養教員団所属の関連分野の教員や、神学教員団の教員などによって構成される委員会の管理下に置かれている。さらに、主として学部生むけに開講される演劇学の講義には、講師として舞台俳優などの専門家が招かれており、教養教員団所属の教員によって構成されている運営委員会の面々は、実際には補助的な講義のみを行っているようである。同種の現象は、一般教育の中にも見ることができる。後述の通り、学部教育には、文章表現、量的推理に関する講義が含まれているが、これらの講義は、特別に雇われた教員が行い、両科目の運営委員会に所属する教員は教壇に立たない。

教養教員団の構成を概観するために、表１に、各学科・分科（医科学分科は除く）の構成員の内訳を示した。表中の数字は、各学科に所属する教員の数を表し、講義のみをもつ他学科・他教員団所属の教員の数は含んでいない。ただし、単に講義をもつというだけでなく、複数の学科に所属している教員は幾名か存在する。複数の教員団に同時に所属するという例も幾つかある。また、原則的には、学科に所属する教員のみを教養教員団に所属すると見做したが、量的推理、文章表現専門の教員数も表に掲載し、合計にも含めた。前述の通り、実際の講義やプログラムの管理は、学科のみならず、各委員会によっても行われているが、この内訳は掲載していない。各委員会には、学科所属の教員が重複して含まれており、また、他教員団の教員も参加しているためである。

表１中、Proは教授（Professor）、AscPは准教授（Associate Professor）、AssPは助教授（Assistant Professor）、Ｌは講師（Lecturer）、Preはプリセプター（Preceptor）、Ｉはインストラクター（Instructor）を示す。プリセプター、インストラクターという名称

は、日本では馴染みが薄いが、通常、語学や基礎的な訓練を担当する教員を意味する。このうち、インストラクターは、ハーヴァードでは、学部教育のみに携わる教員の名称である（II、p. 10.）。肩書きの頭につけたSは上級職（Senior）を表し、Vは客員（Visiting）を示す。

肩書きのもつ意味合いは、各学科によって異なるが、ほぼ一般的に妥当すると思われる説明を付け加えておく。通常、教授と准教授はsenior　facultyとよばれ、テニュア（終身在職権）をもった学科の主要な運営メンバーである。上級職の講師・プリセプターも、それに準ずる待遇を受けていることが予想される。それ以外の、助教授・講師・プリセプター・インストラクターなどのjunior　facultyは、通常は数年の契約で雇われており、将来テニュアを獲得できるという保証はない。彼らも学科運営に携わるが、責任と権限は、junior facultyに比べれば小さい。ただし、これらは、日本でいう非常勤講師の制度とは異なっており、テニュアはなくとも、彼らのほとんどは常勤である。また、客員教員の多くは、所属大学を短期間（多くは1年以内）休職したうえでハーヴァードと雇用契約を結んでおり、所属学科も特定されるので、これも、日本の非常勤講師とはかなり様相が異なる。

表1から分かる通り、教員団の大半は、テニュアを持つ教員、さらにいえば教授・准教授によって占められている。准教授の数が少ないのは、この肩書きは、教授職までの移行的なものとみなされているからである。教員の中に占める比率から言って、教育の根幹を担っているのは、教授・准教授群であるといってよいであろう。プリセプター・インストラクターは多くないうえ、語学の訓練が重視される分野（語学・文学や地域研究）に集中して在籍している。彼らが担当する基礎的な訓練を除けば、学部・大学院ともに、教授・准教授が講義の主要部分を受け持ち、短期契約の助教授・講師群、さらに短期の客員教員がこれを補うという体制がとられているわけである。

さて、以上のハーヴァード大学の体制を、日本の組織におきかえて表現すれば、1年生から4年生までの全ての大学生が、単独の大学院も有する1つの巨大な学部（例えば東京大学の教養学部を大きくしたようなもの）に所属してそこで教育をうけ、他の学部は全て大学院教育に専念するといった状況にでもなるのであろうか。この体制は、専門大学院の充実ぶりを物語ると同時に、学部教育のはばの広さと奥行きの深さをも体現しているといえる。日本では截然として区別されがちであり、また、担当する教員にも区分が設けられがちであった一般教育・専門教育・大学院教育の全てに対して、全学最大の規模と設備をもつ教養教員団が、区分を意識することなく一貫して責任を負う体制がとられているのである。実際、教養教員団が担当するコア・カリキュラム以外の講義には、講師の許可があれば、原則として1年生から大学院生まで、どのレベルの学生も参加することが出来る。なお、講義を特に学年別に編制しない方針は全学的なものであり、前述の通り、教養教員団以外の教員団に所属する教員がカレッジや教養大学院で多数講義を行っているほか、教養大学院以外の大学院で開かれる講義に学部生が参加することも可能である（ただし経営学大学院を除く）。近隣のマサチューセッツ工科大学とのクロス・レジストレーション（両大学の学生は、どちらの大学の講義からも単位取得ができる）も含め、学部教育の自由度は、制度的に保証されているといってよい。

学部教育の実際

アメリカの大学には、飛び級や、「クム・ラウデ」・「マグナ・クム・ラウデ」・「スマ・クム・ラウデ」といった称号など、日本の大学にはない制度があるため、ハーヴァード1校に限っても、学部教育の全容を紹介するのは難しく、また、その必要もないものと思われる。従って、ここでは、学部教育を支える2本の柱、コア・カリキュラム及びコンセントレーションという制度の紹介と、若干の補足をするにとどめることとする。

ハーヴァードの新入生には、基本的には所属学科はなく、日本でいう理系・文系の区別すら存在しない。将来、学士号を取得する分野は、学生が入学してから自分で選択し、その選択に合わせて授業をとるというのが基本的な学部教育の在り方である。さらに、同じ分野においても、授業の選択は学生によって大きく異

なることがある。

学部教育の多様性と柔軟性を支えるのが、コア・カリキュラムとコンセントレーションの組み合わせという制度である。ただし、ここに達するまでの基本条件として、どの学生も、何らかのかたちで、前にふれた量的推理、文章表現に加えて、外国語に関する能力の証明を行うことを要求される。このうち、量的推理と外国語に関しては、テストを受けて十分な成績を修めるか、一定期間の講義をうけて単位を取得することによりその能力を証明できる。文章表現に関しては、全ての学生が授業をとり、その単位を取得しなければならない（HS、pp. 21-26.）。これらは、大学での勉学を行う上での「読み書き算盤」にあたる部分を保証するものであるといえる。

実質的な学部教育は、コア・カリキュラムから始まるが、これは日本でいう一般教育にあたり、専門教育に相当するコンセントレーションと対を構成している。ただし、コア・カリキュラムは、原則として4年間のうちいつ履修することも可能で、特定の学年のうちに修得しなければならないわけではない。

コア・カリキュラムは以下の10の分野からなる（HS、p. 27.）。

Foreign Cultures	Literature and Arts C
Historical Study A	Moral Reasoning
Historical Study B	Science A
Literature and Arts A	Science B
Literature and Arts B	Social Analysis

上の各分野には、以下に述べる通り、多種多様な講義が所属しており、学生は10の分野から最低八つの分野を選んだ上で、それらからおのおの一つの講義を選択し、履修する。ただし、コンセントレーションの選択に応じ、10分野のうちから、最大限二つのコア・カリキュラムは履修を免除される（HS、p. 27.）。逆に、選択したコンセントレーションが、特定のコアを選択することを要求することもある。

分野構成の特色は、人文・社会・自然科学に、芸術が加わっている点にあろう。8分野を必ず選択するという条件から、例えば、二つのHistorical Studyはどちらもとらずにすますことはできるが、三つのLiterature and Artsのうちからは、必ず一つが選択されねばならない。二つのScienceはどちらも選択せずにすますことができるように見えるが、後に述べる理由から、これは実際はほとんど不可能である。

各分野には、10から30の講義が所属している（CI、pp. 1-44.）。たとえば、Foreign Culturesという分野では、アジア、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、イスラム圏、アフリカなど世界の諸地域における、政治、経済、文学、芸術など様々な分野の話題が、講義題目として取り上げられている。Historical Study、Literature and Arts、Science等複数の下部分野をもつ領域では、当然のことながら毛色の異なる分野のすみわけがなされている。たとえばLiterature and Arts Aは文学を中心に構成され、同Bは非言語表現、すなわち、視覚および聴覚表現に関わる領域を扱い、同Cは文化史を取り上げている。また、以上の簡単な紹介からも分かる通り、10の区分はそれほど厳密なものではなく、たとえば、Foreign Culturesに属する「文化大革命」という講義は、Historical Study Bの科目として選択することもできるというように、各分野の間で、講義が属する領域の読み替えも行われている。

コア・カリキュラムの理念を、大学は次のように説明する（CI、p. 1.）。

> コア・カリキュラムの哲学は、全てのハーヴァード卒業生は、特定の専門分野、すなわちコンセントレーションにおいて訓練をうけると同時に、はば広く教育されていなければならないという確信にもとづくものである。学生たちがこの目標に到達するためには案内が必要であるということ、また、教員団は、彼らに、教育をうけた男女の身分証明ともいえる、知識、知的技術、思考習慣へと導く義務を有するということも、前提とされている。
>
> しかし、コアはその他の一般教育のプログラムとは異なるものである。このプログラムによれば、広い知力とは、一群の偉大な書物を読み解くことや、特定量の情報を消化すること、また或る分野の知識の現状を調査することとは定義されない。そうではなく、コアが目指すものは、学生に、教

員団が学部教育にとって不可欠と見做す分野における、知識への到達方法を提示することなのである。以下のことを示すのが目標である。これらの分野に、どのような種類の知識やどういった形の探求が存在しているのか、異なった分析の手法はいかにして獲得されうるのか、またそれらはどのように利用されるのか、その価値はいかなるものなのか。主題とするところは異なっていても、それらが強調するのは或る特定の思考様式であるという点で、各分野に所属する講義は等価であるということができる。

各分野に所属する講義の多様性は、各分野それぞれの方法論における統一性と両立するとみなされているわけである。

一方、各学生は、1年次終了までに、一つのコンセントレーションを選択し、卒業までに各コンセントレーションの要求する履修科目を修得しなければならない。コンセントレーションにおける教育は、主として各学科によって担当されるが、中には、政治学と経済学、物理学と数学というように、二つのコンセントレーションを組み合わせたジョイント・コンセントレーションや、学生が自分の要望に応じて構成し、当局の許可を受けて成立するスペシャル・コンセントレーションなどといった特例もある（後者の例としては、都市研究、神経科学など。FC、pp. 1-3.）。

ジョイントでもスペシャルでもないごく普通のコンセントレーションは、全部で41分野ある。この中には、教養教員団の学科の構成と同様、旧来からある学問・芸術分野のほとんどが含まれているほか、女性学、環境科学と公共政策といった比較的新しい領域も組み込まれている。各コンセントレーションへの学生（1年生以外のほとんどの学生は、何らかのコンセントレーション分野に所属している）の分布は、たとえば1994年5月の次のようなデータから推し量ることができる。最低5％以上の学生を有し、全体で59％の学生を吸収するコンセントレーションは、この時期、生物学、生物化学、経済学、英米語・英米文学、政治学、歴史学、心理学、社会研究の八つであった。また、上位10のコンセントレーションに、66％の学生が吸収されている。なお、日本の大学における学科選択の場合と同様、実験設備などの状況により、コンセントレーションによっては定員を設けているものもある（FC、p. 1.）。表2には、1993年11月から1994年6月までの、各コンセントレーションの卒業生数を示した。

コンセントレーションからの要求は、分野によってさまざまであるが、必修および選択科目、演習・実験・実習・個人指導、卒業論文・卒業試験などの組み合わせによって卒業のための条件が構成される点は、日本の大学とさほど変わりはない（FC）。

実際の講義は、日本のそれよりは、文系・理系を問わず極めて要求度が高いように思われる。講義内容に応じて、「学部生むけ」、「主として大学院生向け」などの区別はあるが、どの学年の学生がどの講義にでても構わないのが原則であるのは、すでに述べた通りである。一つの講義が、講師が教壇にたって行う授業と、参加者の理解度を確認するsectionから構成されている場合も少なくない。このsectionにおいては、大学院生のティーチング・アシスタント（ただし、ハーヴァードでは、大学院生の補助教員をティーチング・フェローと呼び、大学院生ではない補助教員をティーチング・アシスタントと呼ぶ。II、p. 36.）の指導の下で、講師がほぼ毎週課すレポートを中心に、議論や演習が行われる。sectionがない場合でも、ほぼ毎週レポートを課したり、量の多い参考文献に目を通すことを要求する講義はかなりある。

コンセントレーションが学部教育全体においてもつ意義について、大学は以下のように説明する（FC、p. 1.）

「コンセントレーション」を、最も単純な言葉で説明すれば、特定の学問分野、専門領域に、学生が関わりをもつことであるといえる。この「関わり」とは、教養教員団の指導下、その分野の知識と論理を習得するためのものである。コア・カリキュラムと、量的推理、文章表現、外国語に関する要求が、全ての学生に対してはば広い教育を与えることを目指しているのに対し、コンセントレーションは、学生に、特定分野のある程度深い追究によって得られる分析力を与えることを目標としている。

他の大学においては、「専攻」、場合によっては「副専攻」といった言い方もされることがある。しかし、「コンセントレーション」という言葉は、専門的な研究に伴う深さ、要求、知的興奮と集中度とを、より正確に指し示している。学部でコンセントレーションを修得するものには、独立した、偏見のない思考と判断を獲得し、コンセントレーションによって可能になる、創造の過程と発見についての意識を養うことが期待されている。全てのコンセントレーションは、学生に、知識の或る統合体を、体得、評価、応用する機会を与える。彼らはまた、選択した分野において、知識の境界を拡大する作業に参加することができる。

こうした方針を見る限り、知識の獲得よりも、各分野独自の論理や分析方法の習得を基本的な目標とする点では、コア・カリキュラムの目指すところと大きな差はないようである。コア・カリキュラムにおける個性的な講義により、多様な分野の方法論を紹介された学生が、コンセントレーションにおいて特定の分野に集中的に入り込み、その分野に固有の手法を獲得するというのが、ハーヴァードの目指す学部教育の姿であるといえる。

なお、コアとコンセントレーションの制度上の関係について、幾つか具体例を示す（FC、pp. 8-11.）。例えば、人類学というコンセントレーションを選択した場合、Social Analysisというコアは選択を免除されるので、それ以外の九つのコア分野から八つを選択すればよい。ただし、人類学では、Science AおよびBの選択を必須条件として学生に課しているので、この二つは必ずコアの中から選択されなければならない。また、物理学というコンセントレーションを選択すると、Science Aの選択は免除されるので、残り九つから八つコアを選択することになるが、その際、コンセントレーションからの要求により、八つの中にScience Bを含めなければならない。

二つのScienceを、どちらも選択せずにすませるのは難しいというのは、以下のような理由による。人文・社会に属するコンセントレーションが、同系統の分野のコアを免除するのは当然であるが、それ以外に、学生の素養が偏ることを防ぐためか、上でみた人類学の例のように、これらのコンセントレーションは、往往にしてScience AとBの両方をコアの中から選択することを要求している。また、自然科学・工学系のコンセントレーションは、自然科学分野での基礎をできる限り広く固めることを目指してか、これも上でみた物理学のように、免除にならない方のScienceをコアでとることを必須条件としているものが多い。コンセントレーションをどう選択するにせよ、Scienceをコアから選択せずにすますことは困難なのである。ただし、地球惑星科学、生物学、生物化学、物理科学（物理学とは別で、数学・物理学・化学・天文学・地球惑星科学などを広く学ぶコンセントレーション）では、Scienceの二つを両方とも免除分野に指定している。ちなみに、その場合には、学生は、Scienceの二つを除いた全ての分野から一つずつ講義を選択しなければならない。

比較的自由度が高いように見えるコア・カリキュラムとコンセントレーションの組み合わせにも、極端なケースを防ぐべく、実際の運用に関する細かい規定が設けられているわけである。ただし、一方で、殆どのコンセントレーションが選択を課しているScienceにしても、A、Bおのおのに10以上の講義が所属しており、またその内容については、科学史や科学哲学へのひろがりをもったものが少なからずある（CI、pp. 34-40.）といった点に注目すべきであろう。理科系の科目を嫌う一部の学生が、自然科学の方面に関心をもつ契機をつかめるような工夫がなされているのである。カリキュラムの自由度は、コアとコンセントレーションの組み合わせという制度と同時に、それを支える教員団の授業担当能力に裏付けられている。

む す び

以上、ごく大まかにではあったが、ハーヴァード大学の学部教育の現況を報告した。説明不足によって、思わぬ誤解を招いている箇所がないかとの不安もあるが、同大学の学部教育の制度の概観程度は紹介できたのではないかと思われる。何かの議論の際、参考にしていただければ幸いである。

最後に、制度の紹介を行った文章のしめくくりとしては、いささか不適切な感想を述べさせていただく。本稿を草するために、あらためてハーヴァード大学の講義シラバス集などに目を通して印象に残ったのは、制度面での特異さよりも、その実質、講義の多様性や内容の充実度であった。特殊な例で恐縮であるが、例えば筆者の専攻する科学史を例にとった場合、筆者の在籍した期間だけでも、数学史・物理学史・化学史・生物学史・医学史などに関する講義のみならず、心理学史、経済学史に関する講義までが開かれており、さらに、時代区分も、いわゆる科学革命期はもちろん、古代から現代に至るまで、およそ注目に値すると思われる年代は、殆ど講義にとりあげられていた。（ちなみに、科学史という分野は名目上はコンセントレーションとしては存在せず、「歴史と科学」という題目で相当する分野を学ぶことができる。大学院の専攻としてはもちろん「科学史」は存在しており、また、ハーヴァードの科学史学科は合衆国で初めて設立された科学史学科である。）教員団の授業担当能力には目を見張るものがあり、この教員団をもってすれば、いかなる制度の下でも高度な教育は可能であろうと思われた。逆にいえば、いかにすぐれた制度上の変革を行おうとも、教育の質の向上に関して、講義を担当する教員の能力にかかる部分は依然として極めて大きいということになる。教育においても、制度は、結局のところそれを運用する人間を抜きにして論ずることはできないものであるということができよう。

参考文献

Harvard University, Faculty of Arts and Sciences, *Courses of Instruction: 1994-1995* (Cambridge, MA, Harvard University, 1994). (CIとして引用。)

Harvard University, Faculty of Arts and Sciences, *Fields of Concentration: 1994-1995* (Cambridge, MA, Harvard University, 1994). (FC)

Harvard University, Faculty of Arts and Sciences, *Handbook for Students: 1994-1995* Cambridge, MA, Harvard University, 1994). (HS)

Harvard University, Faculty of Arts and Sciences, *Information for Instructors: 1994-1995* (Cambridge, MA, Harvard University, 1994). (II)

Harvard University, Graduate School of Arts and Sciences, *General Announcement and Admissions Application: 1994-94* (Cambridge, MA, Harvard University, 1994). (GS)

表1　ハーヴァード大学教養教員団の構成

学科／職種	アフリカ系アメリカ人研究	人類学	応用科学	天文学	生物学		ケルト諸語・諸文学	化学	古典学	比較文学	地球惑星科学	東アジア諸語・諸文明	経済学	英米語・英米文学	美術
					分子・細胞	生体・進化									
Pro	6	18	45	17	21	19	1	15	12	16	19	17	34	24	14
AscP	0	3	6	0	4	4	0	2	2	1	4	0	3	3	0
SL	0	2	2	1	0	2	0	0	0	1	0	0	3	2	5
SPre	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0
小計	6	23	53	18	25	25	1	17	14	18	23	21	40	29	19
AssP	2	7	5	4	4	2	0	2	2	0	2	3	12	8	3
L	0	8	2	18	2	0	1	1	1	0	2	0	8	5	1
Pre	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	1	0
小計	2	15	7	22	8	2	1	3	3	0	4	16	21	14	4
以上合計	8	38	60	40	33	27	2	20	17	0	27	37	61	43	23
VPro	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	1	0	2	0
VAscP	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
VAssP	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
VL	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2
小計	7	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	1	0	7	2
合計	15	38	61	40	33	27	3	20	19	18	27	38	61	50	25

学科／職種	ゲルマン諸語・諸文学	政治学	歴史学	科学史	言語学	数学	音楽	中東諸語・諸文明	哲学	物理学	心理学	ロマンス諸語・諸文学	サンスクリット・インド研究	スラブ諸語・諸文学	社会学
Pro	6	25	28	6	3	16	9	18	12	30	14	10	3	9	11
AscP	2	11	6	2	2	1	1	1	2	5	4	2	0	0	1
SL	0	0	0	1	0	1	4	2	0	2	2	0	0	0	1
SPre	2	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	5	0	1	0
小計	10	36	34	9	5	19	15	22	14	37	20	17	3	10	13
AssP	1	15	7	2	0	*0(12)	2	2	1	5	5	5	1	1	4
L	0	0	1	0	1	12	1	2	0	0	1	1	0	0	0
Pre	0	0	0	1	0	2	1	1	0	0	0	1	0	6	0
I	0	4	0	0	0	2	0	0	1	0	1	1	0	1	0
小計	1	19	8	3	1	16	4	5	2	5	7	8	1	8	4
以上合計	11	55	42	12	6	35	19	27	16	42	27	25	4	18	17
VPro	0	0	2	2	1	1	3	2	3	1	1	5	0	0	1
VAscP	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0
VAssP	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
VL	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	1	1	2	4	1	1	4	2	4	1	1	5	1	2	1
合計	12	56	44	16	7	36	23	29	20	43	28	30	5	20	18

学科／職種	統計学	視覚・環境研究	文章表現	量的推理	合計
Pro	5	6	0	0	489
AscP	1	1	0	0	74
SL	0	4	0	0	35
SPre	0	2	1	0	18
小計	6	13	1	0	616
AssP	0	0	0	0	*107(119)
L	2	1	0	0	71
Pre	0	0	4	1	28
I	0	0	0	0	16
小計	2	1	4	1	222
以上合計	8	14	5	1	838
VPro	0	0	0	0	28
VAscP	0	0	0	0	9
VAssP	0	1	0	0	6
VL	0	6	0	0	16
小計	0	7	0	0	59
合計	8	21	5	1	897

注）

- Proは教授、AscPは准教授、AssPは助教授、Lは講師、Preはプリセプター、Iはインストラクターを表す。Sは上級職、Vは客員を意味する符号。
- 教員を合計した数字は、約700という文章中の数字と一致しないが、学科により所属教員と認める範疇が異なることと、若干の兼任者があることなどによると思われる。

*数学科の12人の講師は全てタイトル付き講師であるため、助教授兼任ではあるが、講師として計算した。

出典）Harvard University, Faculty of Arts and Sciences, *Courses of Instruction: 1994-95* (Cambridge, MA, Harvard University, 1994).

表2　コンセントレーション分野と1993年11月から1994年6月までの修了者数

分　　野	修了者数	分　　野	修了者数
アフリカ系アメリカ人研究	11	歴史と文学	70
人類学	68	歴史と科学	28
応用数学	39	言語学	11
天文学	2	文学	22
生物科学	62	数学	22
生物学	165	音楽	9
化学	41	中東諸語・諸文明	2
化学・物理学	8	哲学	27
古典学	20	物理科学	6
計算機科学	30	物理学	37
地球惑星科学	17	心理学	100
東アジア研究	28	比較宗教研究	14
経済学	188	ロマンス諸語・諸文学	12
工学	41	サンスクリット・インド研究	2
英米文学・英米語	149	スラブ諸語・諸文学	15
環境科学と公共政策	5	社会研究	81
美術	23	社会学	19
民話・神話学	6	統計学	1
ゲルマン諸語・諸文学	4	視覚・環境研究	32
政治学	196	女性学	11
歴史学	92	特殊分野	19
		合　　計	1839

出典）Havard University, Faculty of Arts and Sciences, *Fields of Concentration: 1994-95* (Cambridge, MA, Harvard University, 1994).